千葉・みどりが丘小

3年生が授業でベルマーク学習

小学校3年生の授業でベルマーク運動を学んでいる学校があります。千葉県八千代市の市立みどりが丘小学校（内藤俊夫校長、児童412人）です。自分たちで調べても分からないことがあったため、先生に頼んでベルマーク財団の職員に来てもらって、「インタビュー会」を開きました。学習の成果は、夏休み前に全校児童の教室を回って発表します。

3クラス75人の3年生が「総合的な学習」の時間に、「みどりっこベルマーク大作戦」と名づけて、資料を調べたり、財団のホームページを見たりして学んでいます。

「インタビュー会」は6月29日に児童の実行委員が主催して、3、4時間目に開かれました。説明に訪れた財団の広報部員2人に、「ベルマークはいつ、だれが考えたの？」「登録している（協賛）会社は何社ですか？」「外国にもあるの？」と、疑問に思っていたことをどんどんぶつけます。

――ベルマークはお金ですか？

「お金ではないけれど、財団を通じて学校のためのお買いものをする時、お金と同じように使うことができます」

――ベルマークで家は買えますか？

意表を突く質問も飛び出します。「ベルマークを1千万点ためて家を造る会社に持って行っても、造ってはくれません」

――じゃあ、ニワトリ小屋は？

「飼育小屋や倉庫など、学校で使う建物は買えますよ」

――ベルマークで買える一番高いものは？

職員が「300万円もするプールがあります」「200万円を超えるグランドピアノも」などと答えると、「えっ、え、え、え……」「重買うのと同じなんだあ」と、驚きの声が上がりました。

授業にベルマーク運動をとり入れたのは、「子どもたちの関心が少なかったから」と瀬口朗子（あきこ）教頭は「インタビュー会」実行委員の児童たち。後は瀬口教頭（左）と保護者会ベルマーク委員会の人たち

財団の職員がベルマーク一覧表を手に「約200種類の商品にマークがついています」

財団職員に多様な質問「命を助ける、すごい」

人前で話し、かつ相手の言うことを正しく理解すること、協力する力を身につけることを目指しています。体験学習の観点からも「外の人とも積極的にかかわって、生きる力を育む」ことを重視し、その題材の一つとして、ベルマーク運動学習を選びました。

インタビュー会の後、児童たちは「外国の人、地震があった学校などを助けることが分かりました」「命を助けるベルマークはすごいと思います」などと感想を書いたそうです。

瀬口教頭は「自分たちでマークを集めようという運動に発展しつつあります。この意気込みを生かしていきたい」と話しています。

「総合的な学習」の授業では、人とのかかわりかたや、教えてくれました。保護者会ベルマーク委員会の人たちが一生懸命に作業しているのに、児童がほとんど活動していないこともわかりました。

みどりが丘小は、周辺の人口増加を受けて7年前にできた新設校です。

斬新なデザインの校舎

中庭のウッドデッキは、格好の遊び場に

取材を受けて　ユニークな質問も多々あり、ベルマークについてたくさん調べてくれた事が伝わってきました。力を合わせてインタビューした経験が、皆さんの心に残ったらうれしいです。　（ベルマーク財団広報部　和田直子）

励みになるよ優勝旗

お買い物で校内表彰品

村山学園

ベルマークのお買い物で、運動会の優勝旗と準優勝盾、合唱コンクールや大縄跳びのトロフィーを整えている学校があります。東京都武蔵村山市にある小中一貫校、市立村山学園（斎藤実校長）です。表彰されることで子どもたちが自己効力感を高め、さらに成長して欲しい。そんな願いがこめられています。最上級生に感想を聞くと、学校行事を大切にしている先生と、ベルマークを集める保護者の方への感謝を口にしました。思いは確かに伝わっているようです。

市立第四小学校、第二中学校をもとに、2010年に小中一貫校「村山学園」として正式に開校しました。

施設一体型の一貫校の特色を生かして、1年～9年の発達段階に応じた教育と多彩な学校行事が盛んです。そうした中から「チーム村学」としての一体感と誇りが生まれることを先生たちは期待しています。5月1日現在で25学級、670人の児童、生徒が学んでいます。

運動会の優勝旗は一昨年に購入し、初披露されました。トロフィーは昨年5月に5本、12月に9本と買い足しました。準優勝盾は今年の運動会からです。担当の山田宏先生は「子どもたちのモチベーションを高めて、自己効力感を高めたい。トロフィーにも『村山学園』と書いてある。村学の誇りをもって欲しい」と言います。

大縄跳びは学年ごとの優勝チームに1本と総合成績の1～3位に授与されます。1学期に1回開かれるため、学期ごとにトロフィーが教室を移動します。数本飾られる教室もあれば、ない教室もあります。あればうれしいし、なければ悔しい。それがやる気につながる、といいます。

運動会の優勝旗や準優勝盾、トロフィーを手にする、左から石塚理貴君、本多南七斗君、圓井駿人君

山田先生は「給食の食べ残しゼロも表彰するし、トロフィーはまだまだ必要です。ベルマークで買えるので助かります」と笑います。

運動会の優勝旗を手渡されるのは、応援団長です。優勝した白組の9年、圓井駿人君（14）は「体が小柄なので大きな声を出す練習をしよう」と応援団長を希望しました。優勝旗を受けた時、「優勝してやったぜ」と思ったそうです。

準優勝盾を受けた赤組の9年、石塚理貴君（14）は「点差が開いたので、『ああ、盾か』と思っていました。悔しかったが、何をもらってもうれしい」と言います。

運動会に続いて、10月の合唱コンクールでも実行委員長を務める9年、本多南七斗君（15）は運動会では白組でした。「悔しかった。トロフィーが他のクラスにあると、次は取ってやるぜ、と思う」と負けん気が強いところを見せます。

優勝旗やトロフィーについて、「保護者の方がマークを集めてくださり、先生が運動会や合唱コンを大切にしてくださっている。生徒としてうれしいし、感謝の気持ちを忘れないでいたい」と話しました。

ショウワノートキャンペーン　全国1位表彰

千葉・佐原小

地道に活動3年ぶりに

協賛会社のショウワノート（ベルマーク番号53）の「第43回ベルマークキャンペーン」で、千葉県香取市立佐原小学校（小川泰求＝ひろき＝校長、児童790人）が全国1位に選ばれました。表彰式が6月12日にあり、片岸茂社長が佐原小を訪ねて表彰状と書籍、学習帳を贈りました。

キャンペーンは毎年1月から12月までの1年間に財団でベルマークの検収を受けたショウワノート製品の点数が多い学校から全国1位と全国8ブロックの上位3校を表彰します。

同校のおとぎの部屋（図書室）であった表彰式には、教職員やPTA役員、児童会長の寺岡夏鈴さんとリサイクル委員長の須本春菜さん（ともに6年）も参加しました。

プレゼントに喜ぶ子どもたち

記念品を囲んで。右から4人目が片岸社長、左端が小川校長

「3年ぶりに帰ってきました！」。片岸社長の挨拶に、小川校長らが笑顔でこたえました。佐原小は14年にも全国1位になっています。片岸社長は「ベルマーク運動を継続して盛り上げるのは大変なこと。再び来られて嬉しい」と話しました。

小川校長は「いつも皆で和気あいあいと作業しています。地道な活動で3年ぶりに賞をいただく事ができ、励みになります」と喜びを語りました。

表彰式の後の懇談では、マークの集め方が話題となりました。PTA厚生委員長をつとめる佐藤英理子さんは「各家庭で眠っているマークを、どう集めるかが今後の課題」だと言います。「ショウワノートのベルマークは切り取りやすく、シールになっているものもあり、集めやすい」。マーク専用台紙の活用方法を知り「各教室に置くのはどうでしょう？」と先生方に提案していました。キャンペーンがあると、ベルマークだより等でお知らせできてPTAの印象にも残りやすいそうです。

同社のノートについて、「紙質が良くて書きやすく、消しゴムで消した跡もきれいに消えます。子どもにとって書きやすさは大切です」という声もありました。

佐原小は、ベルマーク運動発足当初の1961年から参加し、昨年10月には累計1千万点を突破し、千葉県内1位です。

佐藤さんは「励みになるキャンペーンを続けて下さり、感謝しています。これからもたくさん集めていけるよう、アイディアを出しあって頑張ります」と語ってくれました。

ショウワノートキャンペーン　各ブロック1位校と集票数

北海道・東北	宮城教育大附属小（仙台市）	5，351
関東	辰巳台東小（千葉県市原市）	12，022
東京	東京学芸大附属大泉小（東京都練馬区）	10，278
北陸・甲信越	中央小（富山県黒部市）	8，493
東海	西山小（名古屋市）	4，640
近畿	常盤小（大阪市）	3，285
中国・四国	高須小（広島県尾道市）	13，102
九州・沖縄	小禄小（那覇市）	13，434

あいおいニッセイ同和損保

ベルマークサポーター

地域中心に3964社

協賛会社のあいおいニッセイ同和損保（ベルマーク番号92）が全国に支店網を展開する強みを発揮して、ベルマーク収集を全国各地の取引先企業に提案し、同社独自の「ベルマークサポーター」を各地で増やしています。2016年度末の3月31日時点で3824社にまで伸ばし、6月末時点には3964社と、さらに増やしています。

同社は、損害保険会社で唯一のベルマーク協賛会社です。さらに11年1月からは、地域の学校へ寄付することを目的に、社内でもベルマーク収集を始めて、地域や被災地の学校に毎年ベルマークを寄贈しています。

鈴木久仁・前社長は16年1月に発足した初代ベルマーク大使7人の1人です。後任の金杉恭三・現社長に引き継がれています。全国の支店も支店長を中心にベルマーク活動を広げるために地域企業と連携しながら取り組んでいます。

同社には「地域AD倶楽部」という仕組みがあります。同社と参加企業が連携しながら、「情報提供」「企業交流」「地域貢献」の三つの柱で、地域貢献を進める仕組みのことです。16年3月末現在、全国2万6千企業が参加しています。この中の「地域貢献」活動の一つにベルマーク運動が位置づけられています。

「ベルマークを集めて輝く未来の子供たちを応援しよう」。同社は、そんな提案資料を用意して、取引先企業にベルマーク運動の流れと、へき地や災害被災地にある学校、海外の途上国の教育支援事業を紹介し、運動への参加をもちかけています。

趣旨に賛同して、新たに収集に協力してくれる企業や団体を「ベルマークサポーター」に登録するわけです。